

# 合 同

No. 469

## 「わたしが悪魔!？」

屋代教会牧師

石坂 和久



「すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。『神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ』」（マタイによる福音書4章3節）。

荒れ野の誘惑として有名な箇所、一つ目の誘惑の言葉です。この後、悪魔は合わせて三つの誘惑を主イエスに仕掛けていきます。この箇所から説教の準備をしている際、衝撃的な言葉に出会いました。それは次のような言葉です。「ここに記されている悪魔とは、わたしたちのことである」。

もしそう考えるならば、わたしたちはイエス・キリストに、何を試み、何を要求しているのでしょうか。

悪魔は主イエスに、人間の腹を満たす救い主になればいいと誘惑しました。人間を満足させる救い主になればいい、そんな救い主であれば受けもいいし歓迎されるだろうと。しかし主イエスは、その提案を拒否されます。そしてこのやりとりは、わたしたちに問いかけるのです。わたしたちは、どこかで、この悪魔が提案しているような救い主を求めているのではないだろうか。自分の腹を満たしてくれる、自分の願いをかなえてくれる、そんな救い主を求めているのではないだろうか。それはまさに自分が、この悪魔と同じ提案をイエス・キリストにしているのではないだろうか、と。

いつの時代も人は、無病息災、家内安全、商売繁盛を願ってきました。そしてそういうわたしたちの願いを満たしてくれる神を求めてきました。この日本において神社仏閣に足を運ぶ多くの人々の心の中には、それがあろうでしょう。そして教会においてもそのことが引きずられていないだろうかと思えます。そういったものを神に求めてはならないということ

ではありません。わたしたちはそれらを神に求めているのです。イエス・キリストが教えてくださった主の祈りの中で、わたしたちはこう祈ります。「わたしたちに必要な食べ物を、きょうもお与えください」。自分の必要を、全知全能なる方、この世界を支配しておられる方に願い求める、これは間違っているどころか、まったく筋の通った正しい行為です。しかし、この悪魔とイエス・キリストのやりとりを聞くと、問われるものがあります。それは自分が神を愛しているのか、それとも神がくださるものを愛しているのか、ということです。

主イエスは、わたしたちの願いをかなえるためにこの地上に来られたわけではありません。当然、わたしたちにパンが必要であることは重々承知されていきました。荒れ野での40日の断食を通して、食べることの必要性、食べられないことの苦しみは、わたしたち以上に痛感されていたことでしょう。けれどその上でなお、それ以上に大事なものがあるということ、イエス・キリストは知っておられました。その大事なものは、罪からの救いです。そのために、イエス・キリストはこの地上に来てくださったのです。いくら食べても、わたしたちはいずれ死にます。パンは、この世限りのものでしかありません。しかし主イエスがもたらしてくださった救いは、この世限りのものではない、この世を超えるものです。主イエスのもたらしてくださった罪からの救いとは、わたしと神との交わりの回復です。神との交わりは、この世を超え、死の先へと続きます。この神との交わりを回復するために、この交わりにわたしたちが生きることができるようにとイエス・キリストは来られたのです。主イエスは、わたしたちの腹を満たす救い主としてではなく、わたしたちの罪を赦す救い主として来られました。ここにわたしたちの本当の必要があるから、ここにわたしたちの本当の幸いがあるからです。

わたしたちの目はどこに向いているのでしょうか。神が与えてくださるものを見ることで止まってしまういませんか。神を見上げ、神に目を注ぎ、神を愛し共に歩むとき、必要は全て与えられます。パンも神が備えてくださいます。しかしそれらが与えられる目的は、わたしたちが神との交わりに生きるためです。神を愛する歩みの幸いが、お一人お一人に豊かにありますように。